

## 第2回静岡大学将来構想推進会議議事録

### 【開会】

(司会)

定刻となりましたので、これより第2回静岡大学将来構想推進会議を開催いたします。委員の皆様におかれましては、本日はご多忙のところ、お集まりいただきまして、誠にありがとうございます。

ここで、本日の配付資料について確認いたします。

(配布資料の確認)

(司会)

過不足や乱丁落丁等ございましたら、事務局までお申し付けください。

それでは早速でございますが、これより本日の会議に入ります。ここからの進行は座長の小長谷様をお願いいたします。

### 【議事(1) 静岡大学「グローバル共創科学部(仮称)」について】

(小長谷座長)

新型コロナウイルスは収束するような方向に全国的に進んでいるのかな、と思います。当地におきましても、感染者が50人から100人という形で、だいぶ減ってきたということで、うれしい報告だと思います。ウィズ・コロナということで、今しばらく我慢が必要かなというふうに思っています。本日もマスクをしていただいておりますけれども、ぜひよろしくお願ひしたいと思います。

当会議は2月2日に第1回目の会議を開きまして、その後4ヶ月近く経っているわけですが、これまで2回のワーキングを開きまして、色々、自由闊達なご意見がありました。誠にありがとうございました。改めて御礼を申し上げます。会議の前に一度、これまでの状況も含めて、振り返りをさせていただきたいと思いますので、よろしくお願ひいたします。

本会議は令和3年3月に取りまとめられました「静岡大学将来構想協議会のまとめ」に掲載されている提言について、その後の検討・取組状況をフォローアップしていくことを目的に開催をしているところであります。

去る2月2日に第1回会議の開催をし、静岡大学の将来構想や現在の取組状況に関する説明を受け、意見交換を行いました。その後、静岡大学が地域である静岡市と共に構想を実

現して行くための取組方策について、発展的かつ具体的に検討して行くことを目的にワーキンググループを設け、2月及び4月の2回にわたって開催をいたしました。

このワーキンググループにメンバーとして加わっていただきました、静岡大学理事で4月まで静岡市教育委員を務めておられました川村美智様に、本日はオブザーバーとして入っていただいております。よろしく願いをいたします。

さて、この間、静岡大学におかれましては新学部構想の検討を進め、3月に文部科学省へ設置申請を行い、併せて4月下旬には新学部設置と地域創造学環の募集停止を学長名でホームページに発表されたとのこととあります。こうした経緯を踏まえまして、本日の会議では静岡大学の新学部構想の進捗についてと、ワーキンググループでの検討結果について、それぞれご報告をいただきます。そして委員の皆様で意見交換を行い、今後の方向性を確認してまいりたいと思います。

それでは議事の「(1) 静岡大学グローバル共創科学部（仮称）について」に移ります。

ここでは、2月の第1回会議以降、静岡大学が進めてこられました新学部構想について、現在の進捗状況や今後のスケジュールなどのご報告をいただきます。本日は委員でいらっしゃる静岡大学の森田理事／副学長からご説明いただけるとのこととありますので、よろしく願いいたします。

(森田委員)

静岡大学の森田でございます。本日貴重な時間をいただきましてありがとうございます。

それでは、資料1に基づきまして、新学部であります「グローバル共創科学部（仮称）」の取組の状況をお知らせさせていただきたいと思っております。

資料の1、1ページ目のところに、概要という形で取りまとめさせていただいております。先ほど、座長の方からご説明がありましたけれども、3月18日に文部科学省の方に新学部の設置計画書を出させていただいているところでございます。その中に、設置計画書の中で書かせていただいた内容の概要がその上に出しておりますけれども、学部名としては「グローバル共創科学部」で1学科の、学科名として「グローバル共創科学科」という形の名称を提出させていただきました。また、入学定員につきましては、115名という形で、学位の名称は学士（学術）として出しております。また、専任教員につきましては、27名という形で、全学的な協力のもとに新学部のカリキュラムと取りまとめて、計画書として出させていただきました。その概要の次に、更に取りまとめたものを、2ページ以降にポンチ絵を含めて、出させていただいたものになります。この新学部については、重複になるかもしれませんが、「育てる人材像」という形で、右側の方に文書で書かせてもらっており、それをイメージさせているのが左側のポンチ絵という形になります。

この新学部につきまして、私たち現代社会が抱える課題というのが、地球規模の環境間などいろいろな課題がありますし、又は地域社会が持つ特徴のある課題等がある、それぞれに

つきまして、社会問題が多様化・複雑化しているこの社会の現状を踏まえて、いわゆる人文社会科学から自然科学に至る多様な知を結びつける、その上で俯瞰的なアプローチから諸課題に取り組んでいく、ということです。そして、これからの未来社会を構想・デザインする人材、私たちはこれを「共創型人材」と呼んでおりますけれども、それを育成するということを目的としております。

また、そういう側面とは別にもう一つの側面を考える必要があると思っております、人々が社会の多様性を理解する、いわゆる、宗教であり、性別であり、いろいろな意味で多様性というところが重要になってきておりますので、それを理解して尊重した上で多様な背景を持つ人々が協働して、社会的な解決に取り込むことができるというふうないわゆるコーディネーター的な、コミュニケーション能力等々を持つ人材を育成したいというふうに考えてございます。そうは言っても、様々な未来の課題の全てを対象にするということにも限界があるかと思ひまして、私たちの新学部では、その中の三つの領域について、解決を特に進めて行きたい、というふうに考えてございます。

その1つ目の課題は、現代に生きる人々が構造的かつ有効的に暮らすための課題という形を取られております。従来の専門知というところに囚われずに、グローバル・ローカル両方で経済・制度・文化的な調和を進めて課題を解決する必要があるということで、その課題解決について取り組むということでありまして。

2つ目の課題ですけれども、これについては新たな価値を創造し、持続可能な循環型社会を実現するための課題、ということをご披露しております。これについては、地球規模での物質循環、これについては今、限界というところが、それぞれ皆さんお気づきになってくるかと思ひますけれども、そこを知ることで、更にサステナビリティのための科学技術を結集して地球規模の課題解決に取り組む、というようなことについて、取り組んでいきたいということです。

3つ目、人の問題になりますけれども、人間はどうあるべきか、ということをお願いして、真の豊かさを主体的に実現する課題取組ということになっております。

これら3つの課題を解決するために、本学部では課題ごとに、国際地域創造学、生命圏循環共生学、総合人間科学、という3つのコースを設けて、そしてそれを学修するという形になってございます。

1、2年次には、それぞれのコースにまたがる形で、幅広くそれぞれの分野を学びながら、さらに3年次以降につきましては、それぞれの学問分野のコースを選択して、実際の課題解決を通して、国際感覚や俯瞰力を高め、この多様で複雑な未来社会の課題を解決する力を養うとしております。

併せて、人をつなぐためには、語学力、また数理データサイエンスのスキル、対話力、創造力等のリテラシーが非常に不可欠でございます。そこで本学部では、これらを見たりする、獲得するための教育にも重点を置いて、進めていきたいというふうに考えてございます。

これが全体の概要でございますけれども、その次のページのところには、更に具体的にどんな能力等があるかということで、グローバル共創科学部（仮称）が求められる背景でございますけれども、上の部分については、先ほど説明したとおりでございます。異分野の人材が深く連携し、総合知を活用して、解決すべき重要課題ということで3つの分野を挙げさせていただきました。総合知を活用できる共創型人材に求められる知識・能力、これから育てる人材として必要なものとして、7点挙げさせていただきました。人文社会科学から自然科学に至るまで、広範な基礎知識を身に付けるということ、そして専門知識の社会への活用力ということ、国際的なコミュニケーション能力、物事を適切に分析する力、社会的課題の解決策を発送するための想像力、多様性を理解し尊重する力、多様な背景を持つ人たちと協働能力、この7つの力を、新学部では、学生に身に付けさせたいと考えております。

その次のページに、具体的にどんな教育をしていくかということで、上の方には、先ほど説明した育成する人材像。そして真ん中には、今説明しましたがその力。これに対してそれを育むための教育ということで、右側に赤いカラムで一般教養から専門教育まで、このようなものを設けていますし、先ほど言いましたようにそれに必要なデータサイエンス、語学教育、デザイン、フィールドワーク等、このような教育を行うことで、この7つの力を身に付けさせたい、と計画しているところでございます。

下の方には、それぞれを問題解決のための具体的なものとして、国際地域創造学コース、生命圏循環共生学コース、総合人間科学コース、の3つのコースを具体的に設けて、それにあたるという形で構想しております。

このような形で新学部については、現在のところ設置申請の内容としてまとめさせてもらったところですが、先ほど言いましたように、4月26日の添付資料になりますけれども、グローバル共創科学部（仮称）の設置申請と、地域創造学環の学生募集の停止に関するアクションメッセージということで、本学のホームページに掲載させたものを、参考資料として付けさせていただきました。一番がグローバル共創科学部（仮称）の設置申請についてということで、今、説明した内容を、端的に特に高校生等にも届くような形で、文章としてつけさせていただきます。そして後ろの方には、次のページには、新学部の求めるイメージ図とか、又は学生募集人員、入学者選抜の予定について、書かせていただいております。そして2番目として、地域創造学環の学生募集停止等についてということで、基本的に新学部の設置に伴って、地域創造学環は令和5年4月入学者の学生募集を行いませんということです。

地域創造学環のこれまでの取組というのは、新学部の方で、その手法や成果を引き継いで、更に発展させるという形で考えてございますので、ぜひ受験生のみなさんには、地域創造学環の成果を組み入れたグローバル共創科学部（仮称）を進路の1つとして考えていただければ、大変嬉しく思うというような文章も併せて掲載させていただいているところです。

静岡大学はこれからも国際感覚と高い専門性を有し、チャレンジ精神に溢れ、豊かな人間

性を有する、教養人の育成に取り組んで参りますという決意も併せて書かせていただいております。このような学長のメッセージを掲載させていただきました。

今後の予定としましては、5月中に、設置審へ提出した計画書に対して、意見が文科省から本学の方に伝達されるということです。伝達されましたら、時間がありませんけども、6月下旬までにその意見に対する補正申請書を作成して、それを提出すると。設置の可否につきましては、8月下旬頃に通知がある予定だということでございます。例年このような形で進んでおりますので、本年もこの形になるのではないかと予想はしてございます。

このような形で、現在グローバル共創科学部（仮称）については、設置申請中でございますけれども、併せて今の状況、又は私たちが育てていく人物像につきましては、今後一層、高校生を含めて地域の皆様にも、広報活動を通じて、新しい学部ができるだけ皆さんのところに、情報が出ていくように、来月ぐらいから広報活動にも力を入れてまいりたいと考えてございます。以上、設置審を含め、前回の2月2日の第1回会議から今日に至るまでの新学部に対する、こういうさまざまな動きを紹介させていただきました。以上でございます。

（小長谷座長）

ありがとうございました。それではただいまのご説明に対しまして、ご質問等がございましたらお願いします。

（今井委員）

ご説明ありがとうございました。

1つ聞いていてよく分からなかった点があるのですが、学環と学部の違いというのはどこにあるかというのが、一番よく分からなかった点であります。それは、学位名とも関係しているのでしょうか。学環の場合は、学位は学術ではなかったと、そういうことですか。学部の運営の仕方と、学環の運営の仕方と、どこが大きく違うのかというのを教えてほしいです。

（森田委員）

学環は、学部とは異なっておりまして、これは教育プログラムでございます。したがって、学部という正式な形態を取っていないというのが、1つの大きな違いでございます。したがって、先ほど示した定員のところで、各部局から新しい学部に定員が移っている図がございましたけれども、そこには学環の定員というのは書いてございません。つまり既存の学部のところの中に、学環の学生が所属する形で、そこからあの学環という教育プログラムを受けて行くという形になっています。教育プログラムと学部という形で、大きく違うというのが、お答えになるかなと思いますけれども、よろしいでしょうか。

(今井委員)

聞きたかったのは、入試は学環でやっていますよね、学環に入った人が、最終的にどこの学部の指導を受けているかによって、受ける学位の名称が変わっていたのかっていうところですよ。

(森田委員)

名称は変わってございません。教育自体は学環で行っています。所属だけが、学部に所属しているだけなので、教育自体は学環の教育を受けるということでございます。

(今井委員)

では学環のときから、「学士（学術）」という名前だったということによろしいですか。

(森田委員)

はい、そのとおりです。

(小長谷座長)

ありがとうございます。はい、柴田委員。

(柴田委員)

新学部は静岡キャンパスに設置されると思うのですが、今、現在、どの辺りを想定されているのでしょうか。

(森田委員)

設置場所としては、静岡キャンパスを想定しているということでございますけれども、場所としては、今までなかったところに新しい学部を作りますので、新しいスペースを、今の既存の中では、まとまって取るということが非常に難しい状況ではありますけれども、各学部、部局等の協力を得て、少しまとまったスペースが得られるように今、調整中ということでございます。

本学は、開学後、こちらに移ってきて、昭和48年とかですが、そのときに造られたビルが、耐久化の問題も含めて、大変老朽化してきているというのも、片方で問題になっていますので、新学部についてこういう契機を基に、片方で校舎等の立て替えとか改修等、併せて進めていくところですから、その辺りの今後の予定も含めて、スペースについては検討しているところでございます。以上です。

(柴田委員)

大谷のなかで、やるという考え方ですね。大谷地区の中で。

(森田委員)

そうです。今の太谷、静岡キャンパスの中に、そこに戻るといふ形になると思います。

(柴田委員)

分かりました。

(小長谷座長)

他にいかがでしょうか。

(玉上委員)

質問というより、お願いと申しますか、感謝と申しますか、この学部が申請できましたのも、静岡市をはじめとして、この地域の方々がこういう会議を打ち上げていただいて、本当に静岡大学を地域が支えているんだぞと、地域がこういうのを希望しているんだぞ、いうことをおっしゃっていただいたことが、こんなに速く、学部申請までに辿ったということだと思います。まず、それを感謝申し上げなきゃいけないと思います。

それと同時に、今まで先ほど申し上げましたけれども、いわゆる教育プログラムであるということは、学生はどこに所属しているのかというのは、一般の方には、さっきもご質問があったように、分かりにくいのですね。これを今回は正式な形で、正式な形というのも、今でも正式な形なんですけれども、学部として、所属を明らかにして作られたということでございまして、これで静岡大学にまた新しい知の拠点ができるということ、大変喜ばしいことでございます。ただ、なかなか、今までの、例えば教育学部とか理学部とか工学部のように分かりやすく、今まで他の大学にもたくさんあって、明治以来同じような学部がたくさんできていますけれども、そういうものとは違う切り口の学部で、どちらかという学び方であるとか、手法であるとか、そういったようなことを名称にしているものがございますから、なかなか一般の方、高校生の方にどこまで浸透できるかというとなかなか難しいですけれども、そこは、現在の地域創造学環の学生さんがたくさんいらっしゃいますので、彼らにぜひ自分の高等学校であるとか、自分の言葉として、よく先生方とコミュニケーションをとっていただいて、学生が内容をきちんと理解し、後輩に説明する方が効果的であると考えます。この学部の申請が認められた後は、うまく学生の方々が高校生であるとか、マスコミの方々であるとか、社会に対してご説明できるように、学部の先生方と、新しく所属される先生方と共に、執行部の方とよくご議論いただいでご説明いただければ、そういう面では非常に高校生が理解しやすくなるでしょうし、またこの学部を出て就職するときの、出口のことを非常に考えなければいけませんので、そういったようなことで社会にも、ご理解を賜れると思

いますので、ぜひご留意していただきたいなど。これは1つの希望でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

(森田委員)

確かに、このようないわゆる未来社会に向けて、それを作り上げる人材の育成というのは多分、各大学で求められているものだと思っていますし、今の社会からの要請に応える形で本学も作り上げてきたものというふう実感しているんですけども、ただ既存の、従来からある学部とは全く違う考え方でいるということでございます。その点について理解を得るということが、大変難しいところがあるかと思うんですけども、この前、1つの例で申し訳ありませんけども、地域創造学環からラグビーのプロチームになった、五郎丸さんが社長になった企業に就職した学生がいるんですけども、その学生が学長と面談したときに言ったのが、その地域のいろいろな課題を取り込むときに、一つの専門的な知識だけではやはり難しいと。かと言って、自分が全ての知識を得ることも、これも難しいと。そうなるべくと、人との協働、一緒に作り上げていく作業が一番大切だ、というようなことを言っていました。そのために彼女は、海外に1年留学したりして、英語力を養ったり、又は人とのコミュニケーションを鍛えたりだとか、いろいろなことについてやってきたことが非常に自分にとってプラスになったと言うことをおっしゃっていらっしゃるので、そういうような、地域創造学環の、いわゆるこれまで付き合った人材だったりとか、やり方であったり、又はそこでうまくいった事例等もたくさんございますので、そういうことも分かりやすく高校生に伝えていくことが大事かなと考えてございます。それを伝え切ることができるように、今、新学部の専任教員となる予定の方たちの中に、入試広報部会という部会を立ち上げて、それを今、検討してもらっているところでございます。SNSを含めていろいろな媒体を使いながら、それを外に広めることで一層理解が広まるように努めてまいりたいと思っております。ありがとうございました。

(小長谷座長)

それでは大長委員。

(大長委員)

新学部構想につきましては、スピード感を持ってここまで取り組んでいただきましたことに対しまして、地元自治体といたしまして御礼を申し上げます。また、ここまで辿りつくには、学内でさまざまな議論があったと伺っております。そのような困難を乗り越えて、改革を断行しようとする静岡大学さんにおかれましては、改めて感謝申し上げる次第でございます。

地元といたしましては、大いに賛同いたしますし、しっかりとこの新学部について支えさ

せていただきたいと考えております。まだ新学部、これは先ほどのこの説明の中にありまして、この4ページのところ、7つの力っていう話もありまして、この中に専門的知識の社会への活用力とか、社会的課題の解決策を発想するための想像力、とこのような力も含まれておりますので、地元自治体と致しましては新学部につきましてその教育の研究成果、これを地域にぜひ還元していただきたい。また、将来を担う地域リーダー、地元自治体としては、大変に欲しています。本当に地域のリーダーというのは欲しています、そういったリーダーを育成してもら、そういうことを期待しておりますのでどうぞよろしくお願いいたしません。

それらの観点から、3つほどご質問させていただきたいんですけれども、1つは新学部が望む学生像、どういう学生を求めているのか、募集の段階でどういう学生に入っていたか、まだ高校生ですので、どのような子どもさん達に入っていたか、1つ伺いたしたい。

もう1つが、グローバル共創科学部（仮称）ということで、名称に「グローバル」という言葉も入っていますので、この学部名称に込められた意図、それから思い、また決定に至るまでどのような経緯があったのかということで、地元としてみると地域に還元してくれれば良いので、グローバルな視点を持ったそういう方が地域に還元してくださると思うんですけども、そのあたりを教えてください。

それから3点目ですけど、地域創造学環が募集停止されるということですから、学環のレガシーというものを、どのように今後引き継いでいかれるのか、この3点につきましてもよろしければ教えてください。よろしくお願いいたします。

（森田委員）

最初に、新学部が望む学生像ということでご質問いただいたということになりますけれども、ただ今、ご紹介させていただいたように新学部におきましては、繰り返しになりますけれども、多様な人々との協働というもの、人文社会科学から自然科学からの知をつなぐ、その2つを持って社会的な課題と捉えて、総合知を創造、活用しながら未来社会を構想デザインできるという、共創型人材と私どもが読んでいる人材を育成するのを目的にしています。したがって、その中で特に3つの分野、課題群ですけども、その現代に生きる人々が創造かつ友好的に暮らすと、新たな価値を創造し持続的な循環型社会が実現する、人間がどうあるべきかを問い続けて真の豊かさを主体的に実現するという、この3つの課題群、コースでございますけれども、これらの3つの課題を通して、未来社会、地球環境、人間環境、これは人間の暮らしや豊かさといったものですが、この3つが持続可能な社会で実現される、いわゆる未来社会、また、それを実現するための問題解決に取り組むというところに、意欲のある方々、ぜひ本学に入って来ていただきたいと思っていますし、そのような方々は今、高校のいろいろなものの学びを通して、聞くと非常にそういうことに関心の高い学生が

多いというふうに聞いておりますので、それらの方々と私たちは新学部を作っていきたいというふうに考えてございます。

2つ目の学部の名称につきまして、グローバルが入っているとちょっとキラキラネームではないとか、落ち着きがないとか、いろいろな意見も当然、当初からございまして、学部名については、何もないところから議論できませんので、「グローバル共創科学部」を提案するけども、これに対してもっといい名前があったら出してくれとか、学内的に議論もさせていただいたり、又は学長をはじめとする執行部と各部局との間で、何回か新学部について意見のやり取りをさせていただきまして、そこでも議論をさせていただいたところがございます。その中でやはり、1つ目の「共創」という言葉については、今ご説明した新学部の中で様々なステークホルダーと連携したり、又は様々な多様なバックグラウンドを持った人々とつながりを持ちながら、新たな価値、社会の仕組みを作っていくということで、これを意味する言葉ですから、この言葉は不可欠であろうということです。

また、グローバルというのは、単にこのグローバルというと、語学的なところが非常に印象深いかもしれませんが、もう少しこの新学部では少し広めに、この「グローバル」を考えております。つまり、国際的に語学を修得して、国際的に活躍できるという形の意味に含めて、もう少し地球規模で問題を捉えられると。だから、静岡市の課題を今いくつか多分多様なものがあるかも知れませんが、これって静岡市の視点だけで解決する問題というのが少なくなっているように思っています。つまりは、その問題というのは、もう少し遠く、宇宙から見て、地球規模で見て、それで解決に持って行くという視点が必要でないかと、そういう意味を含めての「グローバル」ということで、あえて入れさせていただいたということでございます。

最後の「科学」につきましては、これも新しい学部の「グローバル共創」という考え方が、ある意味サイエンスとして成り立つ新しい分野として、立っていけるようなものにしていきたいという、私たちの、少し遠目ですけれども、静岡大学からこんな分野のこういう良い人材を作る教育プログラムと、カリキュラムを提案していきたいということで、科学という意味を込めて「サイエンス」という文言をあえて付けさせていただきたいということで、そういう目指す名称として、設定して現在に至っているということでございます。

3つ目が学環の話で、学環につきましては、本学の有する6学部の教育成果というのもの、学環以外でも、本学部の新しい学部の方には融合するんですけども、それと共に、地域創造学環の成果、これまでの取り組み等も発展的に取り組むと言う、取り組みながら新たな学部を作るというのが、この新学部のコンセプトとして、当初から考えていたものでございます。また、地域の課題の解決に向けては、地域の特性ニーズを踏まえてグローバルな視点も加味した、具体的な問題解決策を立案実行できる、高い専門性を持った人材が必要であるというのが、これが本会議の前身の会議にあたる静岡大学将来構想協議会のまとめの中でも、あったものでございます。したがって、本学としてもこの提言の充分に受けた上で、新

学部の検討を進めてきたということでございます。地域創造学環のレガシーの引き継ぎという点でございますけれども、複雑化多様化する地域問題を発見し、その解決にとって必要な学修を進めるという地域創造学環のこれまでの取り組み、テーマ先行型と言ったらよろしいでしょうか、このような学びについては積極的な地域志向とか、また社会実装と言う意識につながるという成果は、もう7年を迎えて、表に、実質に出てきたものというふうにも実感してございます。そのため更に、地域創造学環で培ったその地域の、先ほど申し上げた、リーダー養成というノウハウが積み上がってきているということ、学生又は地域創造学環に関わる教員も実感しているところでございます。それらを取り入れて、更には今までローカルな課題を基本的に取り組んできてもらいましたけれども、そこにグローバルの課題も加えたいというようなところ、そしてそれが現在の社会に対応するために必要であろう、ということで、これまでの地域総合学環のカリキュラム等と、加えて語学、国際理解科目、海外研修科目、更には必要なスキルでありますデータサイエンス科目等を加えることで、更にグローバル、ローカル、グローカルとよく言いますけれども、その課題解決に資する教育課程を展開して行きたいというふうにも、新学部の議論の中でまとめてきたところでございます。このようなことをベースにしながら、本学部の創設を目指してきましたので、先ほどご質問にありました、地域創造学環のレガシーについては、これからも、その私たちのこれまでの強みの1つだと考えてございますので、それを更に発展するという点について、力を尽くしていきたいと考えてございます。以上3つだったと思うんですが、よろしいでしょうか。

(小長谷座長)

はい。ありがとうございました。大体新学部については、ただ今のご質問とご説明で理解が深まったんじゃないかなと思います。いずれにしても新しい学部ということですので、委員からの意見があったように、分かりやすい情報を出すことに努めていただいて、少しでも多くの学生募集につなげていただければと思いますので、よろしく願いいたします。また、追加の質問等がございましたら、後ほどの中で、追加の質問等もお受けしたいと思っておりますので、よろしく願いいたします。

#### 【議事（2）ワーキンググループでの検討について】

(小長谷座長)

それでは、議事「(2) ワーキンググループでの検討につきまして」に移ります。

これまでに、ワーキンググループを2回開催いたしました。第1回ワーキンググループでは、最初に今後の取組方策案をご説明いただきました。次に意見交換を行いました。この中で、新学部構想に対しましては、新学部の理念・育てる人材像が大切、新学部の効果を大学

全体に波及させていくことが大切、フィールドワークが大切、産業界・行政・大学が連携して取り組むべき、大学教員自身の改革意識も必要だ、などのさまざまな意見が出されたところでもあります。また、取組全体といたしましては、大学と地域とが連携して行くプラットフォームが必要である、大学教育の充実が必要である、などといった意見が出されたところでもあります。第2回ワーキンググループでは、第1回で出されました意見等につきまして、静岡大学・静岡市から考え方をご説明いただきました。次にそれらを踏まえて、静岡大学と地域の将来像について更に具体的に検討し、今後の方向性の取りまとめをいたしました。ここでは、2回のワーキンググループでの検討結果と今後の方向性につきまして、ご報告をいただきます。最初に、資料2「新学部の活用を含めたこれからの取組構想」について、こちらは静岡大学の森田理事／副学長からご説明をお願いいたします。

(森田委員)

資料2に、新学部の活用を含めてこれからの取組構想ということで、まとめたものについて、ご説明させていただきます。

これは、第1回のワーキングの時に、本学の方から、ワーキングのメンバーの方々に、新学部等を中心に、更にはこの会議のページになりますと、協議会の方でまとめた7つの取組と、本学が今年度から6か年かけて、事業、教育研究をどのような方法で進めるかというような中期目標・中期計画を作りましたので、その計画等を具体的に、その7つの提言等と併せてご説明させていただきました。その中で、更に説明を受けて、ワーキングのメンバーの方々にご質問という形、またご意見という形で、5つのポイントについて、ご指摘を受けたということでございます。

その第2回のその5つのポイントに対して、さらに本学で、これについてどのように対応するかということについて、まとめたのが資料2になります。1つ目のご指摘につきまして、新学部ではどのような人材を育成するかという理念が重要だということで、先ほどご質問等もございましたけども、その点について、今回大学としては先ほど言った「共創型人材」を育成するということを目指すということで、ここに書いてありますような静岡大学の考え方をご説明し、それをどう実現するために、下段の方になりますけども具体的な取組ということで1学科3コース制のものを作ることや、総合知の獲得につなげるための課題群の配置という形で、具体的なカリキュラム等の説明をさせていただいたということになります。

2点目につきましては、2ページの方になりますけども、既存の学部や教員を含めて改革の意識を涵養し、大学全体で創造的な改革をすることが重要であるというご指摘を受けましたので、それに対してございますけれども、ご指摘の点はごもっともでありまして、これまでの静岡大学の持ちえなかった新学部の文理融合の教育研究の知見の取り組みというのは、これは新たな取組でございますので、それを新学部に留め置くのではなくて、既存の学

部にも波及させて、お互いに刺激して高め合う仕組みを構築したいという、本学の考え方、今後の方向性をご説明し、具体的なものとしては専門教育、教養教育いずれにおきましても、教育を実施する方に関する、各部局間での連携の幅を広げ、先導して行くということで、大学改革全体に繋げていきたいということで、まとめさせていただいております。

3点目につきましては、地域と連携したフィールドワークの取組の評価が必要というご指摘もございましたので、それにつきましては、地域創造学環の取り組みを引き継ぎながら、新たに国際や理系の知見を取り入れるというようなこと、更には産業界との連携の可能性の拡大を目指して、質・量共に充実したフィールドワークを展開するという形で、本学は考えていることをご紹介させていただいて、具体的なものとしては、学内の新学部と他学部の連携に基づいて、相互の知見化したフィールドワークを開拓していくということで、フィールドワークを更に広げていきたいし、深化をさせていきたいというようなことを、現在これから取り組んでいくということを計画しております。

これによって、先程もありましたけれども、大学全体の教育改革につなげていきたいというふうに考えてございます。ただ、大学だけでフィールドワークが展開するというわけではございません。効果的なフィールドワークの実施に向けては、既存の仕組み、これまで協力した方々と更に密接な教育もありますけれども、今、少し弱いと感じております産業界との協働の場を構築して行きたいと。ぜひとも、産業界と協力しながらこれを進めて行きたいというふうに考えております。その構築について、場としてプラットフォーム等を構築できないかというようなことも、今後検討していきたいと考えてございます。

さらに、ポイント4でありますけれども、IT人材の育成に向けて、大学教育の向上が必要だということで、非常に厳しい意見であり、大学教員自身の教育能力の向上も含まれるということで、私もちょっと聞いたときに反省をしなくてはならないかなと思っておりますけれども、それにつきましては、本学としては、数理データサイエンスにつきましては、全国の中でも本学は非常に先端的な取組をさせていただいておりますし、ここにありますように数理データサイエンスAI教育の、全国大学の推進事業というところで、特定分野校として取り組んできたということでございますし、現在も指定されてございます。そのような実績を踏まえることで、新学部において、更にその充実を図りたいし、又は色々な教育をこの新学部、データサイエンス含めてですけれども、取り込むことでその成果を全学的な教育で展開して行くという横展開を考えていきたいというふうに考えています。具体的なものとしては、資料にございますけれども、AIとかプログラミングとかデータエンジニアとかいうものの理念についてPBL型の実習を行いながら、情報処理技術だけではなくて、実務を備えた人材の育成ということにつなげていきたいと、それを実現、新学部のトライアルアンドエラーを踏まえながら、最終的には全学への教育の展開をしたいと思っております。ただこのIT人材の輩出ということにつきまして、産業界からの強い要請があるということも理解をしておりますので、その検討を含めて、具体的にどんな内容のものが産業界に求められて

いるということと、大学からこういうものが不要じゃないかということとが、合っているのか、マッチングしているのかどうか、というところに非常に問題があると思います。そのマッチングを含めて、産官学の連携の場という形で、IT人材育成の教育内容の検討をしていきたいというふうに考えてございます。そういう意味では、これについてもまた、関係の皆様方と、プラットフォームを作って検討してまいりたいというふうに思っております。

最後になりますけれども、地域での活動として、高大連携というのはこれまでも取り組んできたわけですが、更にその下の、小中学校を含めたところの連携や、更に留学生に対して日本語教育等のところで活動しているということについて、必要ではないかという御指摘を受けましたので、本学としては、地域の大学としての強みを活かした教育を展開するというので、入学生に留まらず、初等中等教育機関との連携を深めるとともに、留学生に対する日本語や日本語教育をしたいということで、静岡市が目指します多文化共生社会というところに、本学としてもコミットして行きたいというふうに考えてございます。具体的な取組としては、先ほど言いましたフィールドワーク型事業というのは、本学のフィールドが、フィールドワークだけではなくて、小中高で展開されているということも聞いておりますので、大学でのノウハウ又はこの授業のやり方等について、本学の持っている教育学部等のノウハウとして、そういうところで展開できないのかということや、また留学生だけではなくて、地域の外国人の方が、地域社会で溶け込んで暮らすための日本語や日本文化の事業等も、リカレントではありませんけれどもそういう形で、社会で展開できないかと検討して行きたいというふうに考えてございます。これについても、本学だけでなく、関係自治体やまたは産業界と、共同で進めていきたいということで、この点についても一緒にご検討いただきたいということで、できたらなと思っております。

このようなこと5点につきまして、第2回目に本学の取組として、更に詳しく説明させていただいて、静岡市、地域の皆さん、産業界の皆さんとの本学との今後の結びつき、又は取組を深めていきたいということで、ご提案させていただきました。以上です。

(小長谷座長)

ありがとうございました。次に資料3、「静岡大学新学部グローバル共創科学部（仮称）に期待すること（案）」及び、資料4、「（仮称）地域連携プラットフォームについて」静岡市事務局からご説明をお願いいたします。

(事務局)

静岡市役所企画局の松浦でございます。自分からワーキングについてのご報告をいたします。座って失礼します。

初めに参考資料1をお願いいたします。令和3年3月に、協議会において取りまとめたものでございます。6ページ、7ページ目をお願いします。協議会において提言をしたページ

になります。6ページの中段に書いてございますが、協議会は静岡市と静岡大学に対し以下の取組を求めるということで、7項目求めております。

その第1番目の項目、新学部の設置について提言、学部を中心とした取組を求めております。また、7番目の項目においては、地域課題を共有し解決につなげる協議の場の構築ということで、プラットフォームの創設について提言をしておりますが、これらについては、ワーキングの中でも議論をしております。

では、資料3に移ります。資料3は、新しい学部期待することの案として、ワーキングにおいて新学部の内容をお伺いし、地域として新学部を歓迎し、応援していこうということになりまして、それを文書としてまとめ、明示をしましょうということで、文章がまとめられております。表紙をめくっていただきまして、その内容でございます。4つの段落に分かれております。1段落目が現在の社会で求められている人材像について、2段落目がそれについての新学部が、それに機能するものであり是とするものであるということ、3段落目は静大全学への期待、最終段落が、地域としての支援をしていきますという表明、という段落構成になっております。少し中身を読んでまいります。

1段落目ですが、脱炭素やデジタル化などで時代が大きく動こうとしている今日、地域の企業、団体は、洞察力、行動力等、コミュニケーション力を有するなど、総合力を兼ね備えた人材を求めている。静岡大学が設置を検討している新学部「グローバル共創科学部」は、文系理系の幅広い分野を学ぶことができ、地域が待ち望んでいたものであるとともに需要沿ったものであると認識している。総合大学での静岡大学には、この新学部の一つの目玉に、全ての学部を含む全学に改革意識を波及させ、学問の垣根を越えた教育研究を展開していくことで、世界中から優秀な学生、教員が集まってくる「世界に輝く静岡大学」をオール静岡大学で目指してもらうことを期待する。我々地域社会は、静岡の高等教育をリードし盛り上げていこうとする静岡大学の取り組みを全力で応援するべく、新学部が設置された際は外部講師の派遣、インターンシップの受け入れ、実践的なフィールドが環境を提供などの支援を最大限行っていく所存です。資料3については以上でございます。

次に、先ほどの森田委員のご説明にも何度か出てきておりますが、プラットフォームについてでございます。いろいろな要素が絡んでくるプラットフォームであろうということで、一足飛びにプラットフォームの組成ができないのではないかという判断の下、この資料の中段でございますが、プラットフォーム組成のためのワーキングを立ち上げて、そこでまずは検討を始めたということはこのペーパーができております。当初のワーキング構成は、我々静岡市と、静岡大学、それから経済界代表ということで静岡商工会議所、この三者でスタートして、検討の状況に応じて順次関係団体にお声がけをしていくということで、本日の会議の場とは別に、ワーキングをプラットフォームのために立ち上げて検討を進めてまいりたいと思います。説明は以上です。

### 【議事（3）意見交換】

（小長谷座長）

ありがとうございます。それではこれより意見交換に移らせていただきます。事務局からの説明も踏まえて、委員の皆様のご意見などをご披露いただければと思っております。また資料3につきましては、本日の会議の内容を確定させ、会議の総意として取りまとめたかと考えています。加筆、修正等の意見がございましたら、併せておっしゃっていただければというふうに思います。

最初の皆さんから5分程度のご発言をいただきます。事務局に対する質問につきましては、発言後にその場でお答えいただければと思います。一巡した後、適宜、お時間の許す限りご発言いただければと思います。それでは大長委員からお願いいたします。

（大長委員）

新学部は、先ほども言いましたけど、地元が待ち望んでいたもので、複雑化・高度化する社会にあっては、課題解決能力を有し、地域の中核となって活躍してくれるリーダー、そういうものが必要であり、そうした人材を育成する機関として、必要不可欠であると考えております。

私たちからもワーキング中で申し上げさせていただいた、このフィールドワークの継続、これにつきまして、いろいろとご配慮いただきましてありがとうございます。これまでの地域創造学環境における取組に加えまして、新たに国際それから理系、この要素が加わって、より充実したフィールドワークが展開されることを期待しております。地元といたしましては、何回も申し上げますが、地域課題解決を養ってもらえるような人材育成、そのための生の課題に直に触れることができる、実践的なフィールドワークの提供などを行っていきたいと考えております。

こうした内容につきましては、資料3の中の文書にはなかなか言いにくいものですから、直接的な言葉は入っておりませんが、本市や地元としては、そういった思いを持っているということ、理解していただきたいと思っております。今後も必要に応じまして地元自治体として、いろいろなところで発言をさせていただきたいと思っております。

それからプラットフォームにつきましては、いろいろワーキングの中でも議論させていただいたところです。先ほどの5つ、静岡大学さんのところでまとめてくださった考え方の中で、5つの中の3つのところで、プラットフォームの構築が必要だという話もありました。その中で、先ほどの前回の推進協議会で、地域との連携のプラットフォームのところですけど、ここが中心になってくると思っておりますけども、これにつきまして、先ほどの説明があったように、まずはスモールスタートのような形になってしまうんですけども、そこから始めさせていただいて、いろいろなプラットフォームの話が出てきておりますので、そこをどう

取り組んでいくのかっていうのも考えながら、進めていければと思っております。よろしく  
お願いいたします。

(小長谷座長)

それでは、柴田委員をお願いします。

(柴田委員)

例えば、今までの大学の内容、教育学部、理学部、農学部、縦に分かれているものが、今  
度の新しい学部は、横断的にこれから新たに進むわけですけど、例えば農学部の中に、グリ  
ーン科学技術研究所とか、防災総合センターとかいろいろな研究機関があって、進められて  
いますけど、そういうところとの兼ね合いは今後どうなるのかということが1点。

それからもう一つは、このフィールドワークの新たな開拓。例えば今、使われているほと  
んどが、農学部の学生が実際に体験をする場面、こういうのが主体的になっていますけども、  
これはやっぱりオール静大で、例えば教育学部の先生だって、小学生に対して時期が来れば  
サツマイモを植えるとかですね、食育教育と言っていろいろなことをやられているわけ  
ですね。そういった実践を、やはり農学部だけじゃなくて、オール静大として活用するよう  
、そういうようなことも、新しい学部では考えていただきたい。

また、もう1つ欲を言えば、全国的にそういった場がない大学も多いと思います。そうい  
う皆さんに働きかけをして、利用してもらおうとか、一緒にやるとか、全国的にPRができる  
ような、そんなことは考えられないかなと。私、最近、意識的かもしれないけれども、静岡  
新聞、あるいは報道機関の報道を聞いていますと、静大の名前が結構出て来るんですね。  
私も有り難いと思っています。例えば、その農場で作ったジャムが金賞を取りましたとか、  
デザインを考えて産地の発売に活用していますとか。あるいは熱海の石流の土壌分析であ  
るとか。結構、静大という関わりが出て来るんですね。ですから、もっともっと、いろい  
ろな関わりを持つように、地域ともう少し、密着できるようなそういうような、情報をお互  
い提供し合って、メディアを活用して、静岡大学の名前を少なくとも県民には広めていただ  
きたいと。それが最終的には、新しい学部がどういうものなのかということも、いずれは高  
校生やご家庭の方が理解するための基礎になるのではないかと、そんな感じもするもの  
ですから、大いに地域とかかわりを持って、新聞報道を活用、取り上げてもらうように、頑  
張っていただきたいなというふうに思います。これ思いついたことだけで申し訳ないの  
ですけども、そんなことも思いました。よろしくお願いいたします。

(小長谷座長)

ありがとうございます。森田委員。

(森田委員)

ありがとうございます。本学では、バイオとか環境とかをより深く研究する機関として、グリーン科学技術研究所というものを設けております。ここでは理学、農学、理系を中心に工学の先生方も含めて、先端的な技術の研究を進めていただく機関として、国際的にもかなり高く評価されているところです。今後、本年度、グリーン研の組織改革を少し進めて、よりその活躍を進めていきたいというふうに思っております。その中のメンバーの中には、当然、新学部に関与している者もおりますので、今後、グリーントランザクションという、いわゆるグリーンというキーワード、今後21世紀、今後の未来社会にとっては不可欠なワードになってきておりますので、その中心にグリーン研を立てて、先導的な研究を展開できるような形、全学的な支援をしていきたいというふうに考えております。

防災総合センターにつきましては、これまで地震はなぜ起こるかとか、いわゆる理系の考え方が中心になったのですけれども、最近では地震が起きた後にどのような避難所を運用するかとか、また物資の供給をどうするのか、復興どうするのかという、いわゆる自然科学的なものというよりは、人文社会科学的な分野が非常に不可欠であるという評価になってきております。そういうものを含めて、今後、防災総合センターと新学部の考え方は、その機を同じにすると考えておりますけれども、そういう幅広く意味で、防災、減災というのを広く捉えて、その考え方や教育をまた地域の方に反映させていきたいなと思っております。

また、フィールドワークについて、オール静岡体制でということですが、これについても現在、検討を始めたところでございます。これらの新学部の設置に伴うということでもありますけれども、今まで各部局がフィールドワークを展開してきたのですけれども、それが個々にやってきたということで、それをもう少しまとめた形でできないかと。また、今までフィールドワークについては、あまり目立たなかった人文社会科学系の先生に関連するということで、これは地域創造学環の活躍、取組が契機になったと思いますけれども、こんな形で今、静岡大学の中では、動きが出始めていますので、全学として取りまとめていきたいというのが私の考え方でございます。

あと、地域との関わりについてということで、これ広報活動にもなるのかと思うのですが、私たち静岡大学は、いろいろな先生が県内のいろいろな箇所で、伊豆から浜松、又は海から山まで、いろいろなところでフィールドを持ちながら研究教育をしてきてるんですけど、それをどうアピールするのかというのが非常に下手でございまして、その辺のところ、苦手なところについては、今回少し事務の方の組織改革をさせていただいて、広報の係だったものを、基金と一緒に、広報・基金課という部署を新たに作って、本年度4月からホームページも改善させていただいたところでございます。

これらは、ちょっとした取組が始まったところでございますけれども、いろいろな私たちが持っている資源であったり、又は取組をいろいろな方にご紹介いただく機会を、更に作っ

て、いろいろな方にご紹介いただく機会を更に作って、理解をいただきたいというふう思っております。静岡大学、別に敷居高いというふうではありませんし、今、私たちが行っている取組というのは、地域の皆さんの理解がないと、進まなくなってきている、進めにくくなっていることも、一面あるかと思っています。したがって、その点については、今後、全学を挙げて取り組んでいきたいなと思っております。以上でございます。

(小長谷座長)

ありがとうございます。玉上委員お願いいたします。

(玉上委員)

ありがとうございます。特に資料3と4のことについて、お話しさせていただきたいのですけれども、今回こういう形で、市の方から、一般的に要望書はよくあるのですけれども、何々してほしいという要望書はよくあるのですけれども、こういう要望をするけれども、我々はこういうことをするんだと、する所存であるということをおっしゃっていただくようなペーパーはなくて、これは本当にすばらしいなと思っております。ぜひ今回は大学にとっては、やっぱり先ほど申し上げた、新しいシーズができることによって、既存の学部とか既存の研究所体制に非常に刺激となって、新しい相乗効果とよくいきますけれども、それが既存の静岡大学の学部、大学院、研究所等に、更に発展の、一つの起爆剤になるのではないかということを期待すると同時に、地域に置かれても、やっぱりここには当然この地域のご子弟も来られますけれども、他の地域からの方も当然来られるわけです。ですから、そういった他所から来られる方が、静岡という非常に魅力的な街で学んでいただくことによって、更にこの街と一緒に考える、そして、元々いらっしゃった地域の課題もあるでしょうし、これはそもそも地域の課題をどういうふうにするかという、いわゆる知的集団と一緒に、解決まで行かないでも一緒に考えていくのではないかというものなのですけれども、それが新しい知の集団が増えることによって、より多角的な、方向ができるのではないかと。特に静岡大学は、ほかに浜松地区は工学部とか情報学部もございまして、そういう面で幅広く、地域の課題に対して、いろいろな解決の方向に導いてくださるものが出てくると。それをまさに地域の方がこういう形で課題を掲げていただく、また一緒になって考えていただく、また支援していただくことによって、本当にこの地域が静岡大学と共に発展すると。静岡県、静岡市が、静岡大学と共に発展しているという、まさにすばらしいことだと思います。深くこれに敬意を表する訳であります。更に申し上げますと、後の資料に出て参りますけれども、やっぱりAIの教育については、そういったようなことをうまく活用するということも考えなきゃいけませんし、何より今ギガスクール構想と言いまして、小中学校では、いわゆる全員にパソコンを持ってもらって、学生が小学児童生徒に、それを活用することになっております。なかなかそこが難しいのですけれども、教員の問題であるとか、カリキュ

ラムの問題であるとか、教材の問題であるとか、難しいですけれども、特に静岡大学教育学部において中心になり、又は他の私立大学も一緒になっていただいて、解決して行くようなことになれば、非常に素晴らしいことだということで、深く期待をしております。そういうことが、この会議で話し合われたことに、まず敬意を表すことであります。ありがとうございます。

(小長谷座長)

ありがとうございます。それでは、今井委員お願いいたします。

(今井委員)

1つご質問を、もう1つ意見と言いますか、思ったことを言いますけれども。1つ、ITを非常に重視されるということは良く分かりまして、ところで、この学部の専任教員が27名と書かれていますが、その中にITの専門家を含めていらっしゃるかというのが質問の1つです。つまり、どのような形でITを自力でやるつもりがあるのかということ。

それから意見なのですけれども、最初の資料、資料1、3ページに「育てる人材」のことが書かれてあります。未来の課題の中に、「創造的かつ友好的に暮らすための課題」ということがあって、ただこのところ友好的でない環境が増えてきている現実があります。それで、グローバル、ローカルの双方で、ということが書かれているのですが、実は友好的でないことが起こっている一つの理由というのが、もしかすると、情報検索によって得られるものを、若者が上位に表示されるもの、つまり自分の考えていることと同じこと、同じ意見の空間に包まれてしまっているという、可能性が高いという意見もあります。そこで、このグローバルというものと、ローカルというのは、決して切り離したものではない、つまり、ローカルこそが、グローバルにすごいインパクトを与えるというふうに、私は最近思うようになったのです。

2016年にトランプ大統領が選ばれた状況の辺りから、嘘ばかりがはびこるようになったのですけれども、その原因の1つとして地方のジャーナリズムがアメリカで崩壊した、それが2010年前後ぐらいからしいですけれども、地方のジャーナリズムが崩壊してしまったので、若者たちは検索で順に出て来るもの、検索のアルゴリズムがどうなっているかがブラックボックスになっている、というのが非常に大きな問題なのですけれども、それで、自分の聞きたいことに包まれるようになってしまったっていうのは、1つの原因ではないかという意見もあります。

そういうことで、このグローバル、ローカルを、二項的に考えるのではなくて、お互いにインパクトがあるのだと捉えて進むべきかなというふうに最近思うようになりました。

もう1つ、最近の若い人は長い文章が読めなくなってきています。小説とか読まない。これは大きな問題で、そこをなんとかしないと、やはりこの短い検索結果の意見に包まれてし

まう、という現状は変えられない。そういう意味で、文理融合は非常に大事で、今度の戦争も、その背景には哲学的な問題があるはずだと思うのです。そういう問題は、解明はちゃんとされてないと思うのですけれども、そこも含めて解明していくというのは、これからの大きな課題で、静岡大学だけじゃないでしょうが、日本全体で考えなければならないと思います。ぜひよろしくお願ひしたいと思います。以上です。

(小長谷座長)

はい、それでは森田理事。

(森田委員)

ご意見をいただきまして、ありがとうございます。IT関係につきましては、ITの情報系の専門家というのは、直接はございません。基本的に遺伝学等で、ITいわゆるアルゴリズム含めて、IT関係の知識を持っている、そして実際にそれぞれの部局でいわゆる情報学の教育担当している教員が1名と、同じように教育学部での情報を担当している教員が1人、計2名、更に情報関連のところから、副担当という形で1名の方が入ってきている。今後その部分については、少人数での教育というのを前提するということを考えてございますので、もう1人、なんとか新しい人材を外から入れて、強化を図っていきたいというのを、今、計画しているところでございます。

したがって、そのIT重視というか、ITはこれから基本的に持たなくては行けないリテラシーになっていくと思いますし、そのレベルが年々、上がってくるだろうと思っています。そういう流れに対応できる教育を展開できるように、当然なら、学内の資源をうまく活用するというのと、足りない部分を学外から持ってくるということで整備して行きたいというふうに考えてございます。

グローバルの話ですが、私たちは何でグローバルという名前をつけたかということの、ある意味、視点の1つが先生からのご指摘かなと思っておりますので、有難くご意見として頂戴したいと思っております。ありがとうございました。

(小長谷座長)

ありがとうございました。それでは馬瀬委員、お願いします。

(馬瀬委員)

私は、ワーキンググループでも委員として参加させていただきまして、非常に有意義な意見交換ができましたことを、感謝申し上げます。ありがとうございました。

新学部に期待することですけれども、ワーキングの中でも申し上げましたが、新しい学部での教育内容というのが、今、産業界が直面している大きな課題でもあるデジタル化、それ

からダイバーシティ・アンド・インクルージョンの考え方、更には持続可能な社会の取組、いわゆるSDGsの概念について、関連付けながら学べるということで、非常に期待も高いですし、時代が求めるニーズに合致したものであり、大いに歓迎するものであります。また、先生方も含めて、フィールドワークを積極的に取り入れていただくことにより産業界との連携も活発になるものと期待をしております。

静岡県というのは、若年層の県外流出というのが非常に大きい課題となっている現状を踏まえ、学生たちを縛ることはできないのですけれども、できれば卒業生には静岡県内にとどまって、就職あるいは起業していただいて、静岡県にイノベーションを巻き起こす起爆剤になってほしいと願っております。

地域連携プラットフォームの件でございますけれども、これを用意するという、私もワーキングの中で述べさせていただきましたが、2つの面から賛成をしております。静岡大学に限った話ではないのですけれども、先生方がどのような専門分野の知見を持っていて、どういった研究をしているかといった情報が、なかなか見えにくいという状況がございます。そこで、1点目としては、そのプラットフォームにはネット上でサイトを立ち上げるというような方法で、そうした情報を一元的に発信するような役割を担ってほしいというふうに考えております。併せて、過去に地域連携に取り組んだ事例を紹介したりとか、大学との連携に対して活用できる補助金であったり、助成制度を紹介してもらうというような、そういったものも情報を一元的に発信するようになれば、利用価値が高まるのではないかと考えております。

もう1点、産業界、商工会議所の参画メンバーとして当初から入っているということもありますけれども、産学官がそれぞれの課題認識を率直に意見交換できるような、情報交流の場となることも期待したいと思っております。例えばインターンシップの受け入れということですが、これをやるにしてもいざ始めるとなると、大学側が求める内容と、それから企業サイドが求める期間であったりとか、時期、あるいは学生が期待する効果、例えば単位認定であったり、就職活動の関連付けをしたいといったニーズ、そういったものが必ずしも一致しないケースもやり始めれば出てくると思うのですけれども、そんなときに、それぞれの思惑が一致しないからやめようということではなくて、お互いの意見を尊重しながら最適解を見つけていくということが必要になるので、そういった調整機関的な役割も、このプラットフォームには期待したいと考えております。以上です。

(小長谷座長)

ありがとうございました。それでは川村オブザーバーをお願いいたします。

(川村オブザーバー)

川村でございます。2回のワーキングで、委員の皆さんからすごく積極的な御意見を伺う

ことができ、実は私も改めて静岡大学が静岡県にある意義というのを、もう一回認識し直したところなのですけれども、実は教育委員をしている4年間で、静岡市内なのですけれど、小学校にたくさん視察に回りました。その中で丁度、コロナ禍に入っていたのですけれども、例えばオンライン教育の技法とか、それからデジタル教材の開発のところに、静岡大学の先生達がかかなり関わっていたりとか、それから多文化共生の分野では日本語教育のところ、やはり静岡大学でその辺りを専門に学んだ方が先生となって、頑張ってもらっちゃるというようなことをいろいろなところで拝見することができました。それから、学生さんたちが教育実習において、例えばSDGsを中学生がどのように取り組んでいるかっていうようなところを、教育実習でやっていたりとか、そういう本当に小さな個々ですけれども、いろいろな場面で、静岡大学の先生やあるいは学生さんたちが、地域の中で貢献されているというのを実際に拝見してきました。柴田委員がおっしゃったように、そういうことをやっている、できればオール静岡大学というか全大学でやっているよ、ということ、もう少し整理して、そして情報発信していくと良いのではないかな、ということを感じています。

先程申し上げたことと重なるのですけれども、やっぱり小中高校生にとって地元の比較的近いところに総合大学があるってところは、やはり今まであって当たり前みたいに感じていて、それほど意識化されていなかったと思うのですけれども、遠くに行かなくても国際的な知見を得られるとか、それから経済的になかなか学費が難しいところでは、地元こういう大学があるってところでは、すごく頼りになるような存在になっていくと思います。そういう意味では、この新学部を一つのきっかけとか、機会として全学的に地域に開いていく、あるいは国際的に拓いていくっていう一つのきっかけにしていただけたらと思っています。ありがとうございます。

(小長谷座長)

ありがとうございました。一通りご意見を賜ったところでありますけれども、2回目ということでご意見をお持ちの方いらっしゃいますでしょうか。森田理事の方からお願いいたします。

(森田委員)

今回、新学部に期待するということで、このように大きな期待を表明していただくとともに、ご支援もお申し出いただいたということで、静岡大学として非常に重く受け止めておりますし、今後の私たちが新学部を作り、そこで新しい教育研究を展開しながら全学の改革に努めていく、というようなことについて、大きな力を入れたということで感謝申し上げたいと思います。また、その責任の重さも同時に感じておりますので、私たち執行部として、また静岡大学全体として、地域がこのような期待をお持ちいただいているということと、それに応える責務があるということについて認識し、再度、全学として取組を形で表していき

いなと思っております。

また、地域連携プラットフォームにつきましては、先ほど馬瀬委員からありましたけども、フランクな意見交換の場と、後は最適解を求めると、私たちもそのとおりだと思っております。そういう場を通じて様々な地域の活性化につながるところに、静岡大学としても貢献していきたいですし、またこういう意見交換の場を通じながら、今まで静岡大学に眠っていた、又は表に出てこなかった成果についても、掘り下げる機会になったり、又は表に出す機会になったりすることが、期待できるのかなということを思って、今意見を聞かせていただきました。

本当にこのようなプラットフォームにつきまして、本学としても、次の大学の改革につながっていくということを期待しておりますので、是非、ご協力お願いしたいなと思っております。ありがとうございました。

(小長谷座長)

ありがとうございました。他にご意見等はよろしいでしょうか。

それでは、最後に、取りまとめを行いたいと思います。まずは、資料3「静岡大学新学部グローバル共創科学部（仮称）へ期待すること（案）」ですけれども、本案についてはこのような形で宜しいでしょうか。

(異議なし)

(小長谷座長)

はい、ありがとうございます。それでは事務局案の提案どおりに内容を確定させて、会の総意として、取りまとめを行いたいと思います。ありがとうございました。

次に、資料4「(仮称)地域連携プラットフォームについて」であります。事務局提案どおり、プラットフォーム組成に向けたワーキングを立ち上げていくことを、会として、確認するというところでよろしいでしょうか。

(異議なし)

(小長谷座長)

はい、ありがとうございました。それではそのようにいたします。

【議事（４）その他】

(小長谷座長)

最後に、(4) その他でございます。何かこの際ですので、ご意見ご発言等があればいただきたいと思いますがいかがでしょうか。

最後に、1点、私からお願いがございます。第1回会議の際にご説明がありましたとおり、この会議は協議会のまとめのフォローアップが必要であるとの文部科学省からのご助言に基づき、開催をしております。その結果につきまして、文部科学省へご報告する必要があると考えております。加えまして、地域として新学部構想に賛同し、一体となって支援していくことや、文部科学省が推奨している地域連携プラットフォームについて、その取組を進めていくことをしっかりとお伝えすべきと考えております。つきましては本日取りまとめいたしました「静岡大学新学部グローバル共創科学部（仮称）へ期待すること」を携えて、会議の内容を文部科学省へ報告していただきたいと思っております。こちらにつきましては、会議の設置者である静岡市副市長の大長委員にお願いしたいと思っておりますが、よろしいでしょうか。

(大長委員)

そのようにいたします。

(小長谷座長)

それでは大長委員、よろしくお願ひいたします。

ありがとうございました。本日予定していました議事は以上となります。2月から4ヶ月間かけて、この会議を進めておりました。委員の皆さんには、本当に特別なご理解ご協力を賜りまして、本当にありがとうございました。また、私の拙い進行でありますけれども、委員の皆様のご支援にあらためて感謝申し上げます次第でございます。

以上を申し述べまして、司会を事務局の方にお返しさせていただきます。

(司会)

皆様、ありがとうございました。本日はご多忙のところ、最後までご参加いただきまして、誠にありがとうございました。

以上をもちまして、第2回静岡大学将来構想推進会議を閉会いたします。ありがとうございました。